

2021 年 2 学期始業式講話（中学生及び高校生共通）

校長 皆川 勝

始業式にあたって、本日は、やるべき事は主体的に、自ら進んで実行しましょう、ということに関連した、詠み人しらずの、英語の short story を紹介します。まずは英語で。発音が良くないですが、ご容赦ください。まずよく聞いて下さい。2 回繰り返します。

The Story of Everybody, Somebody, Anybody and Nobody

This is a story about four people named Everybody, Somebody, Anybody and Nobody. There was an important job to be done and Everybody was sure that Somebody would do it.

Anybody could have done it, but Nobody did it.

Somebody got angry about that because it was Everybody's job.

Everybody thought Anybody could do it, but Nobody realized that Everybody wouldn't do it.

It ended up that Everybody blamed Somebody when Nobody did what Anybody could have done.

次に、私のつたない日本語訳を読み挙げます。

やらなきゃいけないとっても大事な仕事がありました。誰かがそれをやるだろ

うと全員が確信していました。

誰でもできる仕事だったけれど、誰もそれをやりませんでした。それが皆の仕事だったので、それをだれもやらなかったことを、ある人はとっても怒りました。

誰かがそれをできたはずだと全員が考えていましたが、誰もそれをやらないだろうということを、誰も実感していませんでした。

結局、誰にでもできることを誰もやらなかったので、全員がある人に不平不満をぶつけました。

いかがでしょうか。誰かがやるべき、誰かがやるだろう重要な仕事があったが、結局誰もそれを実行しなかった。皆が人任せで、自分から進んでやらなかったことと、報告連絡相談（ほーれんそー）を含めた適切なコミュニケーションをとらなかったことなどが原因と思えます。そして、誰もそれをやらなかったことに皆が不満や怒りをぶつけている、ということです。自分もやらなかったことは棚に上げて、他の人を非難している状況ですね。

コロナの感染状況は、依然として厳しい状況で、特に、10代の皆さんも含めて

若年層の人にも広がり、重症化する人も増えています。しかし、現段階の決め手であるワクチン接種が全国民に広がるまでにまだ時間を要し、さらにはそのワクチンの限界や、次々と新しい変種が出現しています。まさに、with コロナの時代に、私たちは生きてゆかなければならないように思えます。

自分が感染しないよう、人に感染させないように、一人ひとりが、自分事として、実践することは必須です。さらに、仲間の中で、お互いに感染リスクを下げるよう、お互いに注意しあう、ということが重要です。ぜひ、他人事ととらえず、また、言われたことを最低限守っていればいんどしょ、という態度ではなく、自ら進んで、主体的に、自分やその周囲の人間が、感染状況や医療機関のひっ迫状況を、さらに悪化させることのないように、尽力をしてまいりましょう。

また、今日紹介した short story は、コロナ対応ばかりでなく、私たちの社会のなかで、社会を構成している私たち一人一人が、どのようにかかわって生きてゆくのか、そして適切なコミュニケーションの重要性、ということに関連した教訓としてくれると嬉しく思います。

以上